

見学調査報告書

テーマ : サプライチェーン／果物の輸入における国際物流事業者の役割
ゼミ名 : 山本 慎悟 ゼミ
調査日 : 2024 年 12 月 10 日 (火)
調査先 : 日本通運株式会社東京食品ターミナル事業所／
佐川グローバルロジスティクス株式会社東京 SRC
授業科目名 : 課題演習Ⅱ・演習Ⅱ
参加学生数 : 9 名 (1 年)、2 名 (3 年)

調査の趣旨 (目的)

国際物流事業者の二大巨頭である日本通運と佐川急便の各事務所・倉庫を訪ね、①荷主企業が構築した (グローバル) サプライチェーンを国際物流事業者がロジスティクスの面から如何に支えているのか、②食品 (特に果物) の輸入手続きと国内流通において国際物流事業者が如何なる役割を担っているのかを知る。

調査結果

午前は日本通運株式会社東京食品ターミナル事業所を訪ねた。本事業所では柑橘類を扱っていたこともあったが、現在ではバナナがメインとなっている。到着後、まずは事前質問に対する回答の時間を設けていただき、その後、場所を移し、バナナの荷役作業や倉庫作業を見学した。バナナは一年中採れるため旬といったものはないが、春先は行楽シーズンということもありバナナの消費量と輸入量が増える時期だという。また、秋は日本国内の果物が増えるため外国からの果物の輸入関税率が上がるという影響もある。近年の果物の輸入傾向としてはアボカド、ぶどう、キウイが増えており、特にアボカドは世界的に増加傾向にあるという。減少傾向にあるのは柑橘類である。バナナをメインとして扱っている本拠点としては以前バナナダイエットブームがあった際に実際に大きな動きがあったという。日本のバナナの輸入相手国はフィリピンが八割を占めており、その次に多いのがエクアドルである。世界の生産量ではインドが一位、中国が二位であるのにその二カ国からの輸入はほとんど無いことを疑問に思ったが、インドと中国は人口が多いため生産量のうち国内流通がほとんどを占めており、フィリピン産のバナナが高いシェアを持つのは距離の近さも要因であるという。バナナには生食用と調理用があり、それぞれ保管温度が変わってくる。栽培方法にも低地栽培のものと高地栽培のものがあり、高地栽培のものの方が甘みが強く価格も高くなる。コロナ禍での影響によりバナナ農園の閉鎖が進み、エクアドルの産地では以前の一割が無くなった。日本国内の購買力もコロナ禍により低下していた。しかし、悪い影響だけではなく海外とのやり取りに置いて電子化が増えたという側面もある。見学した日に着岸していた貨物船には 13 キロの箱が 9 万カートン (1200 トン) 積載されており、そのうちの幾分か荷卸しされていた。倉庫の中は保税地域になっており、保管されるバナナは常に温度が 0.1 度単位、湿度が 1%単位で管理がされており、倉

庫内は13度が基本の温度となっている。輸入されたバナナはまず検疫をし、虫がついてい
るなど不適合の際はガスを使って消毒される。虫が入る可能性を防ぐためにバナナは青い
状態で輸入される。そのため検疫の後は倉庫内で追熟が行われる。バナナは追熟のために
穴が空いた袋に入っており、エチレングスによって追熟が行われる。配送先の距離に応じ
て追熟するバナナを色の度合いによって調節しており、距離が近いものはより黄色く、距
離が遠いものはより青い状態で出荷される。どの地域に輸送するものも日本に到着してか
ら1週間以内には出荷される。検疫段階の青いバナナがある倉庫はあまり匂いがしなかつ
たが、追熟した後の黄色いバナナが保管してあるエリアはバナナ特有の匂いが倉庫中に充
満していたのが印象的であった。バナナ1つをとってみても我々の口に入るまでにこれほ
どの多くの手間がかかっているところを知ることができたことは有意義であった。

午後は佐川グローバルロジスティクス株式会社の東京SRCを訪問、見学させていただい
た。医療品とCDの部門を中心にその運営実態を詳しく見ることができた。医療品の部門で
は、正確かつ迅速な対応が求められていることを目の当たりにした。命に直結する製品を
取り扱っているため、その管理体制は特に厳密であり、ミスをしないための体制がしっか
りしている印象を受けた。ラベルを張り、箱ごとに厳密な管理を行いすべて機械に頼るの
ではなく人主体で行っていた。その中で実務に携わる人々の集中力と責任感の高さに感銘
を受けた。まさに佐川急便のような物流業者が生活には欠かせないインフラを支えている
のだと実感した。一方、CDの部門では、多くのタイトルが次々と仕分け・梱包されていく
様子を見て、エンターテインメントを人々に届けるためにここでも機械ではなく人を使っ
て梱包を行っていたのが印象的だった。見えないところで多くの人が関わり、その円滑な
供給体制を維持するための努力を感じた。この見学を通して、インフラという私たちの生
活にとって欠かせない部分を背後から支えている実務の大変さを改めて感じると同時に、
インフラ自体の重要性を感じる事が出来た



佐川グローバルロジスティクス株式会社東京SRC入口にて



日本通運株式会社東京食品ターミナル事業所
大井大井食品埠頭にて